

# かくうの第一章

減多少増 (20221213-20230930)

(和和翻訳注釈つき)

## 第一章

玄関に横たわる虎に気がついたのは夕方になってからだった。ひんやりとした石畳に腹をひたりとくっつけて眠っていた。上り框に顎をのせ、目は閉じたままだ。

もうすぐ目をさますかもしれない。虎は夜行性だと書かれた記事を読んだ気がする。目を醒ます前にどこかに隠れなくてはならない。

玄関の電灯を消し、奥の部屋の押入れに隠れる。電灯は消さないほうがよかっただろうか。虎はまだ気づいていない。玄関で眠っている。

それは夕方のことだった。

## 第一章 訳

玄関を横に渡る虎に気が密着したタカになる体の韃靼人(1)。品のいい槍を落とした。右畳に腹をしたたりとか食ったりとかを蹴って目の民していた(2)。目の門は叔父の母親だ(3)。

もしも薄暗い目なら冷やす。それはかもしだす結論であり例外はない(4)。虎は夜セックスのために移動する。書かれた記事にしては言葉売る。気がすんだか(5)。目は西に見える恒星の以前にあり、移動しようかと尋ねるが隠れようもなく、歯並びも悪い(6)。

玄関を電車を提灯にして消した(7)。女の部分の店に入るように穏やかに命ずる(8)。電車の提灯は水柱の梢に差はない(9)。ほう(10)。良い太郎か。勝ったか(11)。虎は人殺しだ(12)。気を失わない鳥の糞が頭に落ちた(13)。玄関所では目の民がいる(14)。

逸脱したタカの言霊、韃靼人(15)。

## 第一章 注釈

(1)「玄関」とは「玄関所」のことである。そのような関所を横に渡る虎にはいろいろなものが密着する。「気」はそのようなもののひとつであり、いくつかの方角を示している。そのためか、韃靼人の体がタカになったのである。一般にタカとは一種の鳥だが、一般にカタカナで書かれた場合は揶揄の意味合いが強い。

(2)「ひんやり」とは「品のいい槍」ということである。おそらく関所を横切る虎を退治するために用意したものだろう。しかし、落としてしまった。これは危機である。

ご存知のように、右畳は左畳と対をなす畳でありこれに腹をしたたり、食ったりすると同時に蹴ったのである。「目の民」はこのような技に熟達している部族であったのだろう。それ故に、目の民のように戦うことを「目の民す」と言うのである。

(3)目の門は目の民の大切にしている門である。原文では「閉じたままだ」とあるが、「閉」はあきらかに、「門」と「オ」を間違えて一つの文字に印刷したと考えられる。それ故に、文の後半は「オじたのママ」すなわち「叔父の母親だ」と明言している。「目の門」が「叔父の母親」で

あるとすれば語り手は目の門の甥になる。語り手が語ってる存在であるならば「目の門」もまた人間またはそれに類するものである。「叔父」を「オジ」と書いたのもっともなことである。(4)目はたいてい冷やすのがよい。さらに薄暗い目であればなおさらである。「かもしだす結論」という結論を押し付けようとする語り手のやさしさあるいは優柔不断さがにじみでている。一方で、「例外はない」という断固とした態度示しており、それが何かのたくらみであるかもしれないと匂わせていることにも注意しなくてはならない。

(5)「夜行性」とは、言葉通り、夜に性交のために行く、という意味なので、ありふれた動物であると言えそうだ。そのようなことがらを書いた記事を書いているのである。誰がかといえ、語り手以外にありえない。だとすれば、語り手もまた目の民である。しかも、書かれない記事もあるだろうが、言葉を書くほど墮落していることが伺える。また、このような不毛な議論にこうして結論を示すことで、「気がすんだか」と聞いている。もっともな観察である。

(6)日本語ではしばしば長い文を圧縮して簡潔にする場合がある。「醒ます」は「西に見える恒星の数学」を簡潔にしたものである。天文学には数学が不可欠であるという主張はもっともなことである。その「目」が礼儀正しく「どころか」と尋ねているのだけれど、どくにも隠れる場所がないとなげくのである。その絶望感からか、じっくりとその顔を観察したのだろう「歯ならびがない」とまで言っている。ただ、隠れる時間がないためあせりがあったのか、その言葉はろれつがまわらず「はならない」となったようだ。「歯並び」が「ある」か「ない」かを問われるものであることは、ここで初めて明らかになった。

(7)「電灯」は「電車を提灯」にしたものである。

(8)「奥の部」とは一般に「女性」の体の特定の部位を表す。「屋」とは「店」のことであり、特殊な商売の店であるのだろう。その店を「押」して「入れ」と命じているのだが、その命令が実は「穏やかな命令」であったと明かしている。この「隠」は「穩」のタイプミスである。

(9)「消」水でできた梢のことである。ここでは「水柱の梢」と訳した。「さない」は「差がない」の「が」を書き間違えたのであろう。

(10)「ほう」と感心するほどのことである。

(11)「がよかったらどうか」は贗作者が不要な文字を書き加えたためにわかりにくくなっている。これはいくつかの文が重ね合わされてしまったものである。深く分析することによって「よか」「たろう」「かっただらどうか」をそこから読み取ることができるので、「よか太郎か」「勝っただらどうか」という意味がわかる。

(12)語り手は自分の英語力をひけらかそうとしてここで英語を使っている。すなわち「虎はmarder」であり「虎は人殺しだ」という意味である。

(13)「気づいていない。」とは、「気を失っていない」という文と「運がない」という文をひとつにしたものであり、「気を失わない鳥の糞が頭に落ちた」ということである。

(14)「玄い関所」には「目の民」がいるのだが、横切って行った「虎」には気づいていなかったようだ。眠っていたのだろう。

(15)「それは夕方のこと」はそのまま「逸れた夕方の言霊」と訳して間違いではない。それこそまさに「韃靼人」なのである。

## 第一章 訳

関節の眩しい箇所が生えた木は黄色で三度目の虎は気体の秘密を着飾るそんな夕方である。力の音がする休日の韃靼人(1)。(問題1 □の中に適切な文字を埋めよ)□□□の高価な倉庫を落札した(2)。(問題2 □の中に適切な文字を埋めよ)ナ□は□□□□□だと宣言したので腹を押しした(3)。(問

題3 □の中に適切な文字を埋めよ)祟りであるとか良いことがあり砂糖菓子の就職について□□□町の□氏も手痛い(4)。(問題4 □の中に適切な文字を埋めよ)□□□の問いを述べるのは父でありその母は親だ(5)。

盲目の人の視力であれ、薄暗い目であれ、冷たいし安価である(6)。話が逸れるのはかもしかのせいです(7)。それは結果論であり例のごとく外は内だ(8)。

虎とねずみは夜のごとくに交尾して貯めた精子は多くの動きである(9)。書かれた記事にはあまりないことだが、喧嘩をふっかけているのだ(10)。気が済んだか(11)。トリの目のように見える星は以前から存在し「ね。多く動きハウか」と問われても顔を隠す様子もない(12)。歯並びが悪い(13)。ハワイのラビも亜鉛の心よい(14)

電車を提灯のかわりにして、関節のある眩しい場所までいくと水の梢の下だった(15)。店は女の部分になっていて穏やかに入れるように命ずるずるだ(16)。電車を提灯のかわりにした水の梢を引いた差は0である(17)。ほう(18)。太郎の良し悪しは勝ち負けである(19)。虎は人のメガネを投げた(20)。消滅したエーテル鳥の米とは異なるものが薬だった(21)。玄米でできた関所で目を吐いた(22)。の民が()る(23)。

何時に逃げ出した時力士の言う例こそが韃靼人である(24)。

## 第一章 注釈

(1)「玄い関所」とは、「関節のある眩しい箇所」のことであり、それが体のどの部分なのかは詳らかではない。おそらく手首のことではないだろうか。

この文章全体の話題が「目の民」であることから、「玄」には「目」を補い「眩」と訳するのが自然である。

「横」はあきらかに「黄色い木」を示している。そして、「渡る」とは「三度する」のことであるが、これはほぼ「三度目」のことであると考えて間違いないだろう。「サンダル」という解釈もあるが、この場面で「サンダル」が出てくるのは突飛すぎる。「気が密着する」とは、そのまま訳せば「エーテルが密着する」ということになるが、ここではその解釈は当たらない。すなわち「密」が「秘密」を、「着」が「着飾る」を表していることはあきらかであるからである。

「タカ」の「タ」は「夕方」を指す。そうなるとその後の文は直接的に「力の音」がするほどに「休」(元の文では「休」を「体」と書き間違えている)んでいる「韃靼人」である。

(2)このあと穴埋め問題が続くところを見ると、これはミステリー小説なのかもしれない。一点、セリ業界では「落札した」ことを「落とした」と表現することに注意を促しておこう。

(3)穴埋め語である「右田」に対して宣言したのが「左田」であることは明らかである。宣言と同時に宣言したあとに腹を押したのであり、この攻撃がフェアプレイであることを一言述べているのは、不正が多いからなのであろう。

(4)「食」は「良」の書き間違い。「とか」は「砂糖菓子」の業界用語であろう。「蹴」は「就職」を一文字に圧縮したものである。それよりも「目」と「民」の一部が穴埋め語であったことに驚くべきだろう。「目の民」はどこに行ったのであろうか。謎は深まる。

(5)目の門は叔父の母親だ ここまできて「目」が穴埋め語であることには驚かないだろう。むしろ「門」が穴埋め語でないことのほうに驚きを禁じ得ない。そして、かくのごとき状況を述べる父の母が親であるというが、父であろうと誰であろうと母は親なのである。このような当然の事実すらわからなくなっている今の時代に対する、なにか告発めいた主張をこの部分に忍ばせているようだ。

(6) 盲視も薄暗い目も、それならば冷たく安い。

- (7) 「かもしだす」の後ろに「。」が抜けているので、間違っ了解釈をしやすい。「かもしかのせいだ」と主張しているのは他でもない目の民であろう。
- (8) シンプルな文である。結局、ありふれた「外は内」であるという、鬼に関する説話の解釈の話である。
- (9) 「ネ」と「多」の間で二つの文に分かれるところが間違いやすい。
- (10) 書かれた記事はあまり騒動のタネにはなりにくいのだが、それにしては売り言葉になっている。読まれた記事はその言葉を買うだろうか。
- (11) 「気が済んだか」は目の民に投げた言葉であろう。投げたのは虎とねずみの子供である。成長は早い。
- (12) 「ね。多く動きハウか」なので、How(程度や方法)を尋ねているのだが、それを恥ずかしいと感じてしまう目の民であった。
- (13) 歯並びについて容赦がない。何か経緯があるのだろう。
- (14) これまで隠れていたハワイのラビが登場し、おそろべき事実が明らかにされる。すなわち、ハワイのラビは亜鉛中毒である。
- (15) 「関節のある眩しい場所」は「手首」なので、手首の下に行ったのである。大抵の場合、手首の下にはなにもないので、行った先は「虚無」であったと述べている。
- (16) エロチックなシーンではあるが、どのような状況なのかはわからない。なめくじの性交の描写だろう。
- (17) 提灯とそのかわりにした水の梢の差を計算しているということである。
- (18) ほう。
- (19) 良い太郎と悪い太郎が戦ったのだが、その結果、どちらが勝ったのかによってどちらが良い太郎なのかを決めるのである。
- (20) 虎が人のメガネをとりあげて投げたのである。目の民はよそ見をしていて、気づかなかったのだろう。
- (21) エーテル鳥は絶滅種であり、それは米ではなかったのが薬になる。もしも米だったら毒になっていたのだろう。
- (22) 関所が玄米でできている場合は、嘔吐すると吐くものは玄米でなく目である。
- (23) 「の民が()る」の文章は冒頭の部分と()の中の部分が欠落している。「目の民」でなければ、何の民なのかは明らかではない。
- (24) 「多力」は「力士」の別の呼び方だが、逃げ出した先を「どこ」でなく「いつ」といっているのでこの力士が「時相撲」の力士であることを示していると考えしかあるまい。「時相撲」の言霊は韃靼人であるという事実が明かされたのであり、驚きは禁じ得ない。

## 第一章 駅(1)

季節の眩しい個別の場所に生まれた人が十であり横色の気温三度の目を持つ虎は大気の密度を錐揉み損害多方で存在する(3)。()力の音が「す」であるような体をした目の民の韃靼人だ(4)。

(■■■口■ ■疋■1 ■の■■■に敵を切又子を地理のやつめ(5))目の民の高い西にある倉庫を韃靼人が落札した(6)。

(■■■口■ ■疋■2 ■の■■■に敵を切又子を地理のやつめ)手袋は左無作対右策だ。ほぼ喧しい言い方をすれば楽しい出腹を推薦した(7)。

(■■■口■ ■疋■3 ■の■■■に敵を切又子を地理のやつめ)宗教上の出口であるとか棍棒で殴ったことが愛。砂を問う華子の自由洗濯について偽氏名町の嘘氏も三痛(8)。

(■■■口■ ■足■4 ■の■■に敵を切又子を地理のやつめ)韃靼人の間違いは遠野物語である。斧と理想の母とを比べるとはおやおやだ(9)。

盲目の人の視力であれ。日の暮れた目であれ。愛もなく金もない(10)。話がすばらしい。しかもかもしかの性はたくさんある(11)。逸脱した結び目は果物と言われ、糊をごくごく飲むと、外にいる鬼は内である(12)。虎都不眠実葉町の5-9-2交差点の端に主人公はメタバースの精子を「く」のように動くつもりだ(13)。枯れた記録の事はおまけの庭があり、ないというわけではない。喧しい華にそっと水をかけている。だめだ(14)。気が済んだか(15)。通りに面した鳥居で最後に絶滅した鳥の見ていた星のように絶滅以前から存在していた星をたたき動きをかよう。戸の間が割れても、顔を隠すあの子どももういないことだ(16)。悪いのは唇である(17)。八岐大蛇と対戦した稲葉の白兔に食べられる亜鉛の気持ちはとてもよいものだ(18)。

提灯の代理である電車は西である。関西の節分は存在する。険しい目をしている場所魔大工と木の木の硝子ネ。韃靼人(19)。

占いは女であり納豆を炒める店は隠れ家である。合言葉を卑怯な手口で手に入れた。卑怯な手口でだ(20)。

提灯のにわいである電車は時場所魔大工であり木の木の硝子ネでもあるので差し引くとよいアルコールだ(21)。法である(22)。太郎のよれよれの様子は勝そして勝つことは負け(23)。出歩くな(24)。

虎は人の初投下駄ではない(25)。エーテルの島では米とは異なるもののほうが楽だった(26)。十メートル離れたという関係のある場所で目を吐いた(27)

目の民が五名いる(28)。

## 第一章 注釈

(1) 「訳」と書かれているのは、見過ごされやすいが「訳」の誤訳である(2)。

(2) 分かりやすく読みやすいように、訳は自由であるべきである。

(3) 「関」を「季」と書き間違えている。「三度」が気温であることは明白であろう。おそらく摂氏であると思われる。「気温三度の目」は「目」の温度を測って見たら「三度」だったということである。目の温度は、大気の密度に比例するのであり、密度が錐揉みをしてぶつかることで損害がたくさん発生した方角である。

(4) 「()力」の()の部分は、「リ」または「い」の劣化と考えられる。「す」という音をたてる「リカ」あるいは「いか」ということになるが、その「音」が「す」であると記載されているので、これはおそらく「リカ」である。リカの皮膚のすれあう音は「すー」である。「いか」ではそうはいかない。「目の民」の中で、皮膚の「リカ」が「すー」という音をたてる者のことを「韃靼人」と呼ぶのであろう。

(5) データの保存状態が悪いのか、文字が化けている。判読できる部分について補足すると「切又子」はなにかガラスの製品であろう。また「地理」に対して恨みのあることがわかる。「い策」について。「寒さ」vs「い策」という対決が「手袋」だと述べているので、「寒さ」「い策」は何か「左右」のような概念だろうと思われる。「さむさ」は「左無作」と解釈してよいだろうから「いさく」は「右さく」と書いてよい。このあとの文で、この文が繰り返されているを見ると、地理に対する恨みはかなり深いことがわかる。

(6) ここでは「□□□の高価な倉庫を落札した」の□□□は「目の民」が正解である。競売が行われて、目の民の所有する西の高所にある倉庫を落札したのは誰であろうか。ここまでの話の流れからはそれは「韃靼人」以外にはないだろう。だとすると前の文と矛盾するのだが、この部分は原文に忠実に「目の民」と「韃靼人」は別物として訳した。

- (7) 「ナ口」と「□□□□□」の正解はそれぞれ「手袋」と「寒さ対い策」である。また、ひらがなの「と」はギリシア文字の「と」であり、これによって「と宣」とは正しくは「と宣」であることがわかる。これはつまり、ほぼ「喧しい」ということである。
- (8)前後の文脈から「□□□町」と「□氏」の正解は「偽氏名町」と「嘘氏」である。「三痛」は「と痛」が慢性になったものである。どちらも、痛い。
- (9) □□□の正解は「韃靼人」か「目の民」だろうと考えるだろうが、ここでは「ミダス」である可能性もある。その場合は、ここに書かれたすべての文字が黄金になるのでそのような訳は危険である。この部分は直訳すると「韃靼人の間違いを遠い野に」と「斧と母とのおやおやだ」という二つの文になる。その意味は訳のとおりである。母親についてあきれているわけではない。
- (10) 「盲目」とは「目を忘れた目」のことであり、「薄暗い目」とは「日の暮れた目」のことである。苦しい生活にあっても人に親切にしろという道徳が述べられている。貴重な一文である。
- (11) 何の話なのかはわからないが、すばらしいという評価をしている。しかも、かもしかの性がいくつあるのかは明かされない。何を言いたいのだろうか。
- (12) 「糊」を飲むという習慣があることと、外無や内部に鬼がいることが明らかにされている。世界観がよくわからないと言えるだろう。
- (13) 住所であるところの「虎都不眠実葉町の5-9-2」には交差点の端がある。「して」とは「能」の主人公をさし示しているので、作者はその主人公とそのメタバースの精子を同一視している。精子は「く」のように動くものである。
- (14) 「書かれた」というのは「枯れた」の誤記であるとしか考えられまい。そもそも「書かれない記事」というものは文字通り存在しないからである。「庭」の「あまり」とはその庭がおまけとして作られたという意味である。「おまけの庭」があると書きながら「ないというわけではない」とねんを押しているのは何かうつろいやすいこの世のことわりを書こうとしていると考えるのがよいだろう。「喧嘩」と書かれているがこれは「喧しい華」と書きたくて手元に辞書がなかったために「喧嘩」と書いてしまったと考えるのが妥当だろう。「ふっかける」とは「そっと水をかける」という意味なのは明らか。「のだ」は「だめだ」の意で、「だ」が2回続くので最初の「だ」を省略するという文法である。
- (15) これだけ念を押せば「おまけの庭」の存在を疑うことはできまい「気が済んだか」と確認しているようだ。誰に確認しているのかは考えてみれば自明なので明記していない。
- (16) 「トリ」とは「通りに面した鳥居で最後に絶滅した鳥」を一言で表した用語である。その「トリ」の「目」で見たかのように見える「星」とは「絶滅した鳥の見ていた星」という意味である。「以前から存在し」というのは「絶滅した以前には存在していた」という婉曲表現である。「ね。」は同意を求める言い回しであり、「ハウ」は疑問詞「How」であるから、「多く動きハウか」とはその前の「ね。」と合わせて「たたく動きをかよう」という意味になる。「と問われる」と書かれているがこれは「戸の間が割れる」という意味である。何の戸なのかは明確ではないが、間が割れるので顔を隠すこともできないということである。「様子」とは女性の名前である。
- (17) 「歯並び」のとなりにあるのは「唇」であるから、悪いのはその唇であると書かれている。
- (18) 「ハワイ」とは「八つのわい(自分)」という意味であり、「私」が「八岐大蛇」であることが明かされる。「ラビ」は「ラビット」の短縮形であり、八岐大蛇と戦った因幡の白兔を示すと考えるのが妥当だろう。兔の目が赤いのは「亜鉛」を常食しているからだが、食べられる「亜鉛」の気持ちになってみると「よい」という教訓を垂れている。
- (19) 西に向かっていることがそれとなく描かれている。ここまでにも「鬼」がでてきたり「外」だったり「内」だったりするので、「関西の節分」の登場には違和感はない。険しい目をしてい

るのは韃靼人であり、「場所魔大工」と「木の木の硝子」でもあるネ。とかわいい感じで言ってみた韃靼人なのである。ここで「場所魔大工」というのは「場所悪魔」の大工であろう。「場所悪魔」は「場所」の「悪魔」のことであり、時相撲取りの悪魔なのかもしれない。一方で「木の木の硝子」は「木」と「硝子」橋渡する「木」の存在がほのめかされていることに注意したい。

「時場所魔大工」が使う木材であろうことが想像できる。

(20) 占いを隠すために屋根をつけて店のふりをしているのだから、その部分である「占」こそが「女」である。「なっていて」は「納豆炒め」のことと思われるので、店では「納豆炒め」が人気らしい。「穏やか」は「隠れが」の書き間違いである。「隠れ家」に入るためには「合言葉」が必要だろうが、「命」を「卑怯な手口」で手に入れたことを問題視しているようだ。

(21) 電車は時場所悪魔大工と木の木の硝子ネであったが、その違いは円をなす。無限であり無である。酒である。「かわり」は「かおり」の「お」が「わ」に代わった言葉なので、訳では「におい」の「お」を「わ」にかえた言葉「かわい」とした。

(22) (これこそが)法である。

(23) 「良レ悪レ」は「よれよれ」を無理やり漢字で書こうとして失敗したのでであろう。「無」の様々な側面について述べようとしている。

(24) 虎の彷徨うこんな夜に出歩いてはいけない。

(25) 「X初投下駄」とは「初投下駄」に「X(ばってん)」をつけているので「初投下駄ではない」というような意味である。日本では5歳の誕生日に、西に向かって下駄を投げてその子の幸福を願うという風習がある。そのことであろう。ただし、そのような風習に従ってはいけないという意味の「X」がついている。

(26) 「消滅」という語はその意味の通りに消滅した。「エーテル鳥」は宇宙にあまねく満ち満ちている鳥でありその鳥の体は羽根でなく米に覆われている。

(27) 「米」は「メートル」であり、「玄」は「十」を意味する。どこから十メートル離れているのかは明らかにされない。吐いたということは「目」を飲食していたのだがまだ誰も何ひとつ食べてはいない。む

(28) かくのごとき「民」は明らかに「目の民」であり、「()る」の()に入ることは「めい」であろう。「目の民がめいる」では文としておかしいが、文脈から明らかな言葉を補えば「目の民が五名いる」という意味であることが明らかになる。

## 第一章 馬尺(1)

関所で節分を迎えた目の玄らしい竹で作られた固い戸を一斤煮て生の永遠だった構色で三度笠の目の虎は気の休むネ(2)。必ず暗号を着信した節もあり、損害をうけた多くの万円めでたいな(3)。カキクケコと言う声が聞こえるいい体の日の韃靼人である(4)。

(ばび口ん一の馬の陰莖煮のレストランの切れのいい音叉は子供のもの。ちとちとの奴め(5))めめなめの臭いのする兎に似た生き物の頭部のように口で食べる救急車と韃靼人が深くお辞儀をした(6)。

(ピロロん 一疋×2です 隣の脳髓に店頭の文を「七力で好き」というのは地王星のかフカ(7))(存在しない)は左対右の椎茸の束だ。父母が口論するとき椎茸が話す方を肯定すれば、葉のような山山の複数の月を流した(8)。パブロフの国道道3号線の信号1号犬は商文を切り捨てた。又三郎の子供だナと思いが上がった言い方をする地理のやつはゆるさぬ(9)。宇宙の上空に示されている教えは山々である。口であるとか木であるとかの混じった木材奉行は区役所の蛸と我愛である。石は少なくともモンロウ・業子の白柚子より先に水曜になってイ煮タタ口田Tの嘘兎ほ痛(10)明日も正三

角形似の彼女に彼氏を七つのカラスの子と他の法理の八十の(11)。韃靼人の間違いは遠野物語である(12)。一人の父親と理恵の母親は七七四十九レベルで残念だ(13)。目を忘れた目のの見る力くらべ時。目の腫れた目で愛れ(14)。受信もつよし傘毛ひよこ(15)。話ガムのようだ。鹿もしくは鹿がもしもしかして性はたくさんある(16)。兎ライダーは月の兎だし結論は結果のものだと言われ、湖を語句のごとく食べ欠伸を、升を煮て炒ると兎は丙べめら(17)。虎視眈々は眠れない実業町5丁目9番地2号の交差点の隣に主な入式はメタバースの孫子をくの一の要因に重力靴森田仮説(18)。ネ、古い手紙の記憶の事実はお前の法廷が愛、ないとは岩戸ではない(19)。喧嘩いい事にテスラ水のプールで水球をしている。名古屋の穴子である(20)。汽メが三文月次第か(21)蛹の小顔が烏古着屋に来た時のことである。目を取り、紺色の減った烏の見た四つの星を紺の減った色に似た荊体の仔にいい菰のあった星は蛸のくの字の動きが合図だ。きた。噛めっ(22)。炉の閏割でも、親なをかおすの子。桃ういろうな従兄弟だ(23)。悪いのは善である(24)。八枝八鉦と文寸の杖を下に裾業の百兜煮を食べ、ろれつ亜船の気体値はトーテムのよい篠田(25)。心臓を電化すると酉になる。関西の節分は存在する。英川の目白押しである場所に鬼工業大学と林硝子とが神の出現中。それこそ韃靼人である(26)「トロくじ」は「女性名詞」で、蟻の納屋で豆を弱火にするに決議する。占いの家は当たると心にくる。△/□は言葉である。卑弥呼は行ってしまったな。手で口に手だ(27)。提灯のにわいである電車は時場所魔大工であり木の木の硝子ネでもあるので差し引くとよいアルコールだ(28)。法である(29)。太郎のおれおれの態度はいったんは勝つが勝ち負けである(30)。出歩くな(31)。虎8入の無駄を初めて投下したわけではない(32)。エーデルワイスを歌う米粒は胃の鳴るようなものの頬が音楽的韃靼人(33)。ナメートルで離れた問鶏は場所の関係で目と口が土になっていた(34)。目の民が五名いる(35)。(36)

#### \*注釈

- (1) 日本には「鯨尺」と「馬尺」のふたつの長さに関する尺貫法がある。ここでは「馬尺」を使うという意味で章題を「馬尺」としている。
- (2) 「関節」とは「関所で迎えた節分」の短縮表現である。「竹で作られた戸」はたいてい「固い」。「一斤煮」とは「一斤」の「煮物」といえよう。「生の永遠」とは詩的な表現だが、ずいぶん前に「虎」が横切ったので「構色」になってしまっている。「構色」とは構造に固有の色であり虎が横切ると変化する。「三度笠」は近世日本で使用された帽子の一種で、その帽子が目の中に入ったため目を開けていられない虎はしかたなく目を閉じて「休むネ」とかわいらしく休暇を宣言している。
- (3) 愛想をふりまいているだけでなく、「暗号」を「着信」した様子もあり、そのために受けた損害が「多く」というから数百万円はあるのだろう。直訳すると「多くの万円でめえな」となるが、これは訛りの強い江戸弁なので一般には通じないと思われる。ここでは「数百万円でめでたいな」と訳した。また、「めでたい」というのはその「損害」が虎の損害ではなく別の誰かの損害であり、虎には利益になっているのかもしれない。
- (4) 日本語では「カ」は単独では発音されないので「カ音」というのは「カ行の音」である。「いい体の日」は毎年一月一日の休日だが、「正月」と重なっているため、この日が「いい体の日」であることはあまり知られていない。「韃靼人」はどこにでもいる。
- (5) 括弧の中に書かれた「■」は文字を隠すための文字である。ここでは「ばびろん」と訳した。鯨尺では二丈六尺が一疋だが、馬尺では正確なところはわからない。「地理のやつめ」は「他たぬきの奴め」という意味だが、「他」から「た」を「ぬく」と何も残らないので、訳文からも「地理」の訳語は消した。



(6) 「の」は「め」の書き間違い「民」は「な」の書き間違い「の」は「ぬ」の書き間違いである。かなり疲れていることがわかる。ここで「めめなぬ」とは「めめなぬ」の一種で違いは短い尻尾である。文字通り「倉」は「口で食べる生物」を意味する。また「庫」は「ウ車」が圧縮された文字であり、文字通り「救急車」のことである。

(7) 括弧の中に書かれた「■」は文字を隠すための文字である。ここでは「ピロロん」と訳した。何かチャイムの音がしているようだ。馬尺で一疋の二倍であると主張している。そのあとは「■」に出現する文字の頻度から「隣の脳髓」と訳せざるを得なかった。「七力」は江戸時代のコンロのようなものである。「七力で調理したものが好き」という意味である。おそらく「口で食べる救急車」の好みについて書いているのだと思われるが、ここでは地王星(天王星の外側を回る惑星)の「かフカ」の言葉であると述べているので「口で食べる救急車」の正体が「地王星のかフカ」なのであろう。

(8) よくあることだが「手」は「無」の書き間違いである。「無袋」は文字通り「無」を保存するための「袋」だが、ここでは「袋」自体が「無い」ことを意味していると考えるとわかりやすいだろう。だとすれば、「無袋」は「存在しない袋」ということであり、「(存在しない)」と訳すしかない。それはすなわち「左で何も作らない」と「右で計画を立てる」ことの対立であると捉えることができるからである。「父母の口論の場」でどちらの発言に味方をするかどうかは難しい。どちらに味方をしたのかを曖昧にするために「椎茸の発言」という表現を用いているのである。「薬のような山山」は「薬草が生えている山々を旅して」というほどの意味である。驚くべきことにここには「月」が「複数」あるのである。「月」はたいてい「液体」なので流れていくが、その液体が「薬」であることは記憶しておく価値があるだろう。

(9) 括弧の中に書かれた「■」は文字を隠すための文字である。「パブロフ」は「犬」の枕詞である。「国道道」はしばしば「国道」と略されるが、ここでは略せずに訳した。国道なので「3 ■」は「3号線」と補うのが自然である。また「国道」なので次の「■■に」は「信号1号」が適切な訳であろう。ちなみに「号」をひらがな一文字「こ」に圧縮しているのは作者の力量が偲ばれる。「信号1号」に「犬」を補ったのは枕詞「パブロフ」の被枕詞だからである。「商文」は「商業文法」の圧縮語であり、「犬」の教育程度が高いことを暗示している。「商文」を切り捨てたとあるので、「犬」は「帯刀」を許された「武士犬」かもしれない。「又」は「又三郎」のイニシャルであり、「子」は「子供」のイニシャルである。「子供だナ」という言い方で「地理」が「犬」を見下しているのがわかる。その犬の気持ちが「地理のやつはゆるさぬ」という表現になっている。

(10) 「棍」は「木であるとか混」をあわてて一文字にしてしまったものである。また「木材奉行」を短縮した文字が「棒」であるので、「口であるとか棍棒」は「口であるとか木であるとかが混在した木材奉行」と訳せる。「が愛」は「我愛」の「我」という文字を知らなかったために「が」と書いたものだろう。「華子」は「業子」と極めて似た文字でありまた画数も多いので間違いやすい。「自由シ」は「白柚子」のことであるのは明らかで「先濯に」とは「先に水曜に」と訳さざるを得ない。「夕口田T」の「T」は「Teacher」の「T」であろう。イニシャル表記をしているのは「嘘兎ほ痛」が教師であることをうやむやにしておきたかったからである。また「も三痛」は「ほ痛」の誤記であり「ほ痛」であったことを隠したいという気持ちが働いたものと思われる。

(11) 括弧の中に書かれた「■」は文字を隠すための文字である。元の語は「トモロウ」であるが日本語では「明日」という意味になる。次のあたりの文が、あきらかに「4」が「形」の誤記であることを指摘すれば適切な訳であることは理解されるだろう。「切又子」は文字通り「七つのカラスの子」である。「地」は「他」を誤記したものであり、「地」と「理」の間に存在する「法則」を考慮すると「理」は「法理」と訳するのが相応しいことは理解いただけるだろう。「やつめ」

は「八十め」であるが、他の部分でも繰り返し「め」を「の」と誤記していることから、ここは「八十の」と訳すしかない。「八十の」何であるのかは、このあとに続く文で明らかにされるのだろうか。

(12)ここでは「韃靼人の間違い」が「遠野物語」だと打ち明けられている。「遠野物語」とは何であろうか。訳者は不可分にして知らないのである。これが「問うの物語」であれば今ここで書かれている文章こそがそれであると答えてもいいだろう。そうなのだろうか。そうではないのだろうか。

(13)馬尺での「父」の単位は「斤」である。ただしこれは近似にすぎない。正確には「丘」のようでもあり「食パン」のようでもある。

そのような父の一人と理恵の想う母を少し比べると、 $7 \times 7 = 49$ なので素数ではないという残念なことになる。

(14)「目」を「日」と間違えているため、原文は意味が伝わらなくなっている。「日」を「目」とすることで「暮れた」は「腫れた」であることがわかり、「あれ」は「めれ」であり「愛れ」であることがはっきりとする。「目のん」は「目の」「ん」なので「目に生えた毛のようなもの」であろう。

(15)「愛」は「受信」を一文字にした文字であり「金」は「傘毛」を一文字にした文字である。「傘毛ひよこ」とは「毛が傘のようにになっているひよこ」であり、受信電波が強かったため、卵の中で逆さまになって成長したのだろう。

(16)「話ガム」は雑貨屋でみかける、話すようによく噛むガムあるいは噛むと話をはじめるガムのことである。「しかもかもしかの」は複雑な文であるため訳を間違えている。話ガムを噛みながらの文であるところが難しさに拍車をかけているとも考えられる。正確には「鹿もしくは、鹿がもしもしと電話に出て、しかも貸しもしかしもない」というような意味だが、これでは日本語として意味がわかりにくいので、訳文のようにした。性はたくさんあるので性はたくさんある。

(17)「逸」は文字通り「兎ライダー」のことであるから文脈を考慮すれば「脱」は「月の兎」を指す。「結び目は果物」というのは幾分暗号になっているが中心となるのは「結果」と「結論」でありこれらの語に着目すれば訳は単純である。「ごくごく」を「語句のごとく」と訳すか「極語句」と訳すかは議論のあるところだ。続く「飲む」ということから「極語句」は飲みにくいので「語句のごとく」をとった。「外にいる鬼は内である」は「節分」にとらわれすぎた誤訳だろう。「外」は「升」の誤記であり、「鬼」はこれまでの文脈から「兎」のことであるのは明らかだ。細かい誤訳はいろいろあるが「内である」が「丙べめら」と訳すべきなのは議論以前の問題であろう。「丙べめら」とは三番目の「へめら」のことであり「へめろ」になる直前の「へめら」だと考えてよいだろう。「へ」と「ら」の間に挿入されている「め」は語が女性名詞であることを示す格女子である。

(18)「虎視眈々」はこれまで登場していた「虎」の名前であると考えられるしかない。「実葉町の5-9-2」は住所である。その住所には「交差点」がありその隣に存在する「森田仮説」について言及している。いくつか誤字がみられるが正しくは「入式」で定義される「メタバース」の「孫子」の平方が「くの一」つまり女忍者の「重力靴」こそが「要因」であるとする「森田仮説」である。なを「重力靴」は「重力」によって歩ける「靴」である。

(19)「枯れた記録」は文字通り「ネ、古い手紙の記憶」であり、誰に向かって同意を求めているのかは問うまでもないだろう。なお「れた」は日本語で「文字」であるとともに「手紙」のことである。「事」とは「事実」の略語である。「庭」はそもそも「法廷」を意味しており「あり」は「あい」のタイプミスであるつまり「愛」のことである。「ないというわけではない」は「ないとは岩戸ではない」と訳すしかない。

(20) この部分は特に翻訳上難しい部分はない。「華」は他の文でもしばしば「事」と書き間違えていることを指摘しておく。「喧しい華にそっと水をかけている」を直訳すれば「喧嘩いい事にてつら水とかいてける」となる。ここで「てつら水」とは「テスラ水」のことであり「かいてける」すなわち「掻いて蹴る」はおそらく水球をしているという意味であるから以上をまとめて「テスラ水のプールで水球をしている」という意味であることがわかる。「だめだ」は文字通り「ナごあナご」である。「名古屋の穴子」というほどの意味であろう。

(21) 「三文月」とは江戸時代のお金の「三文」の形をした「月」のことを言い「三問月次第か」は「はした金でなんでもするのか」というほどの意味である。

(22) 「烏古着屋」は黒い服だけを扱う古着屋である。蛸はたいてい小顔である。ことさらに小顔の蛸が店に来たと言いたいという事だろう。烏の目は紺色が認識できない。烏はいろいろな星を見ているがその中でも四つの星に着目している。ただ紺色が減ったのではなくそれに似ているが荊体をした仔鳥に良いといわれる萐のような星を叩く動作が合図なのである。誰に命令しているのかは明らかであろう。

(23) 「閏割」とは閏月に適用される割引である。「親なをかおすの子」は「悪人なおもて往生を遂ぐ」へのオマージュであろう。子供というものはかおすなものである。「桃ういろう」は「桃のういろう」である。

(24) 悪いのは善である。とは「いわんや善人おや」の敷衍であろう。

(25) 「八枝八蛇」は八本の枝で串刺しにした八匹の蛇のこと。文寸は馬尺による長さの表記で約400字寸。「裾業」は服の裾でカルマを貯める事。「百兜煮」は兜がに料理の一種。「ろれつ亜鉛」は「亜鉛」の一種で接種すると「ろれつ」がまわらなくなる亜鉛のこと。「気体値」は「気体」になって欲しいという値。「トーテムのよい篠田」は「篠田家」の中でも「よいトーテム」を持つ篠田家のことを指す。ここでいう「篠田家」は目の民の一部族であり、韃靼人である。

(26) 「提灯」は形が似ているのでしばしば「心臓」の暗喩として使われる。このことから「提灯の代理」とはまさに「心臓」のことである。「電車」は文字通り「電化」のことであり、他の部分でも繰り返されているが「西」は「酉」の誤記である。続きでは、関西にも節分は存在することを改めて確認しなくてはならない理由があったのだろう。「英川」は関西に存在する地名であろう。「鬼工業大学」は「鬼」に伝わる「工業」を学ぶ「大学」である。「節分」は「鬼」の枕詞である。この「鬼工業大学」すなわち「鬼工大」とその取引先とおぼしい「林硝子」は今まさに神が出現している途中であることを「神」の偏で「ネ」だけを書くことで表現していた。このことを「韃靼人」に伝えているわけだが、語り手は韃靼人とは親しい仲であるので、語尾に「ネ」をつけているわけだ。「ネ」の解釈が重複しているように感じられるが、それは「神」は遍在しているからである。

(26') 「電車」→「電カー」→「電化」

(27) 「トロくじ」は「ロト」の間違いかもしれないが、原文のままとした。作者はかなり「女性名詞」にこだわりがあるようだ。「蟻の納屋」といえばかなり小さい建築物だと思われる。そこで「豆を弱火で煮る」ことが決議されたのである。△/□が言葉だという指摘は言語学的に重要かもしれないが、ここでは議論しない。卑弥呼はとっくに行ってしまったのだが、あらためて嘆息している。卑弥呼に思い入れがあったのだろう。そして、「手で口に入れた」と言い終わる前に「手だ」と繰り返しているので口に入れるにしても手で入れたことに不満を持っているらしい。

(28) 「にわい」は「におい」の単純な書き間違えである。「時場」は「磁場」と「電馬」に垂直な場である。電車がその「時場」に所属する大工であるということから、電車は人の名前かもしれない。というのも「へのへの椰子」のような顔をしているらしいことが示唆されているからで

ある。「引力」はもともとめでたいものだがめでたい「差」とあわさることで「十分」であると考えられる。

(29) まぎれもなく法である。

(30) 「太郎」が「桃太郎」であることは文脈からあきらかである。

(31) 不要不急の外出は禁じられている。

(32) 実際には「虎8λ」の投下のみならず「虎8λの無駄」をも初めて投下したのである。

(33) 「エーテル」は宇宙に満ちているが多少の濃淡があり濃い部分を「エーテルの島」と呼ぶ。「米粒」は毎朝歌う。「韃靼人」の中で「音楽的」なものは、しばしば「米粒の歌」を歌うからである。

(34) 接着剤を誤って付着させた場合「なめツール」できれいに拭き取ることができる。「問鵜」は「質問」をまるごと飲み込もうとするが、その間は理解できないので、問鵜飼に取られてしまう。問鵜の目と口が土になるともう問は受け入れられなくなる。

(35) それは韃靼人も五名いるということである。

(36) それにしても「かフカ」はどこに消えたのだろうか。

#### 弟～甥 長い言い訳(1)

間接の節目で仰天した眩しいδ、いつ竹で作られたのか。囲い戸を一兵卒と生の水、早かった。構う巴で三度。立ち竹皿の虎は汽体の体。私。心、暗い声の号令着古したと言う。櫛より、絹吉もうけた叩くめ方丸べあでたいいな。過去の聞く傾向を問う声すら超えるいい体の目の韃靼人べめる(2)。

(まで。ベ口(3)。くの一の馬(4)の陰謀は、省リス(5)の虎の一切れ(6)だ。15の音(7)または了解のもと。らてらての女(8)または女(9)ああ。十億の酢(10)。いのる兜(11)こそ人以上に生き、物の豆の頁の部分(12)よ。うにの口(13)で食べる数炎券(14)と。韃靼人が潔くお世辞を(15)した。(ピグモン二疋(16)です。店の前におかれていた文が「巧みが好き」だと隣に住む脳髄に言うのは誰でもない地王星に住むカフカである)(存在しない)は左文(17)。まさに一寸の右でできた椎茸の束である(18)。斧田が椎茸を口で食べながら話す力である。そうである。毒の溶岩の二つの山では何ヶ月も過ぎた。○||□-の国(19)は「定理3⇒暗号1λ筒」(20)という文を切り捨てた。十人とともに考え「音叉三郎の子供だ」と、うわずった話し方のスルタンは地理の試験で不合格だ。上空にある宇宙の教えることはわかってはいるのだけれどわかっていてもどうしようもない。困るほど混θ(21)な木材は三どに行く(22)。切れ役で所により肖蛾(23)の受容体である。右はなんなく左は苦勞な紋白蝶(24)。素了の白拍子寄りの牛(25)には躍びを担いでネ。煮た夕口芋田楽での嘘兎(26)は痛風。明日も正しい角の形に三拝(27)。彼女=彼氏と七つの硝子の端と地理の法則の八十め(28)。韃靼人の間にいる達人は高校野球と出会う。ペルーの斧と理系の雲母は7749レベルになってもクリアできない残留思念だ。目を忘れたので、目のんの目がらく、らべ侍(29)。目の離れた目でめるでい。受信もっとよし。鼻毛ひこひこ。話ガムの妖精。鹿も鹿も鹿も鹿もしかも鹿そして性は澤山である。兎兎については自明だ。糊をごくごく食べて欠ける身長。チト似ていると兎兎はへべれけのめらめら。虎の視力は沈みがち。目の民はもれなく実数-6(30)の交点の鱗にまなび。λ方程式にバターやフを加えてはダメです(31)。猿の子←因幡の重力革(32)。これが化森の十の反論。神様。ライオンの手は紙です。憶測の事は、実は以前には法でした。庭は愛です。夜は岩ですし、芦は夜です。喧しい。事実はアマテラス水(34)の青い水玉でした。最終列車の発車時刻は三交月(36)次第なのか? 月の光で孵化する蛹は顔が小さいので、鳥に仮装する(37)ための古着屋に来たときそれは起きた(38)。鳥の目尻に、甘い色の糸を感じた鳥の見た目は禿星

二匹。甘い糸。感じた巴以上に。茱里は休み好きといい、暖かく非難した星(39)は蛸のくの一の重さが合同だ。きいた(40)。口の歯なめ。燃える戸の門で王様割引き。親ならもちろん混沌の子(41)を押す。桃ういろの好きな従兄弟(42)であることよ。親鸞(43)曰く、悪は善である。枝は!蛇は!と、一寸の文が木の丈より低い声で言う。裾を激しく百の兜とともに煮込んで食べ、ろれつの垂鉛(44)で作った船は気体であり野生の気圧はとてよく売れる。これを篠田と呼ぼう(45)。心臓に電気を通すと酉年の声が聞こえる。関西にも節分は存在する(46)。そこそこ韃靼人である。「 $\text{口} < 2$  は証明可能」は女性でありかつ名詞である(47)。そして、虫の定理(48)は納豆の部屋。弱いのは火だと決意をする(49)。矛盾の証明は家でやれ。 $\forall \exists$ は心臓に悪い。3/4は営業に出歩く(50)。卑弥呼は行ってしまったかなり。手で口から毛玉を出した。堤防の街灯に私ですと言った。とある電車は時と場と空間に関する大魔王の蟻である。米の硝酸は予め衣モアレなので、差を引くとよい。それはとある電話だった。法則である。桃の俺の恐れの高さは一反は月極めの券が勝負である。アネクドート! 虎肌のムードについては以前から語っていた。音楽の音のウスユキソウは小さい。空腹は頬の内側から始まる韃靼人。七メートル離れて問うニワトリは場所との秘密の関係があり、口口口と口が±でうなっていた。目の民が五名いる。古い名前の家では穴子がいい。

#### \*注釈

(1)どうも最近の翻訳は質が悪いようだ。質というかそもそも間違っただけばかりだ。何か誤訳をひけらかしているような気配さえ感じられる。たとえば「第一章」が冒頭の一語の訳だが、これは本来は「弟から甥」という意味である。弟よりも甥のほうが背が高いのと同じように、それぞれの訳は元の文よりも長くなっていることは間違いない。また、その後続く文は「馬尺」というよりも「長い訳」であると考えべきだ。さらに長い「尺」というものは言い訳であるから「長い言い訳」と訳するのが適切だろう。

(2)改めて原文と訳の対応関係をみてみよう。

元 関所で節分を 迎えた 目の玄いら しい 竹 で作られた 固い戸を一斤煮て生の永 遠だった 構色で 三度。笠の目 の虎は気の休 むネ。

訳 間接の節目で 仰天した 眩 しい $\delta$  いつ 竹 で作られたのか。 困い戸を一兵卒と生の水 早かった。構う巴で 三度。立ち竹皿の虎は 汽体の体。私。

「眩しい $\delta$ 」 「眩しい $\alpha$ 」から「眩しい $\delta$ 」まで最低四つの「眩しい」が存在することがわかる。

この仰天を「困い戸を一兵卒と生の水」と一句詠んでいる。季語は「困い戸」であろうか。

「早かった」というのは、決められた俳句の時間より先に詠んでしまったという指摘である。

「構う巴」とは構えが「巴投げ」に似ているが、実は異なる格闘技の技の名前と思われる。三度もこの技を使っている。相手もかなり強敵であることがわかる。

その構う巴で投げられた虎の立ち上がった姿勢が「立ち竹皿」であるという。「立ち竹皿」は「気体の体(てい)」となった。すなわち「私」である。

元 必ず暗 号を 着 信した 節もあり、損害をうけた多くの万円でめでたいな。

訳 心 暗い声の号令 着古したと言う 櫛より 絹吉もうけた叩くめ方丸べあでたいいな。

「暗い声の号令」が号令でなく「着古した」というのは休戦状態であると暗示しており、これが何かの冗談になっているらしい。

というのも、「絹吉」は普段は冗談にうけたりしないのであろうが、その「絹吉」が「櫛」よりも受けて、手を「叩」いたというのだから、面白いのである。

「め方舟」は、はこぶねの「め」号である。この「め方舟」のベースアップが公表されたのであろう。他のはこぶねの乗組員が「いいな」と言っている。

元 カキクケコ という声が 聞こえるいい体の日の韃靼人である。

訳 過去の聞く傾向を問う声すら超えるいい体の目の韃靼人べめる。

この冗談を聞き「これまでの冗談の傾向はどうだったのか」と尋ねる声よりも大きな声で何かを話している体格のいい韃靼人が登場する。

ここで、その韃靼人の名前があきらかになった。ちなみに韃靼人は「目の民」なので「目の韃靼人」と呼ばれる。

(3) 「ベロ」は「べめる」の愛称かもしれない。

(4) 「くの一の馬」というのは、馬忍者のくの一のことであろう。

(5) 「省リスの」は文字通り「リスク」を最小限まで減らしたものである。

(6) 「省リスの虎の一切れ」とは、「虎」の凶暴性などを「省リス」した「虎」から作られたバターは一切れであるという解釈が最も自然である。

(7) 二進数で1111は十進数で15である。

(8) 「らてらての女」は文字通り解釈すると「日がな一日ラテを飲んでいる女を揶揄した表現」だが、ここでは「へのへの」との対比を考慮し、「抽象化された顔を持つ女」というほどの意味である。

(9) 「らてらての女または女」と「女」を繰り返しているので、「らてらての女」は「女」ではないという意思表示だと考えられる。

(10) 「十億の酢」は、無数の酢のことであり「らてらての女または女」(8)(9)が本質的に酢であると主張している。かいた汗が酢になったということであろう。

(11) 「いのる兜」を纏うことによって「らてらての女または女」すなわち「十億の酢」は祈ることができるのである。

(12) 「人以上に生き、物の豆の頁の部分」は、その「兜」が人間以上に生きることで明らかになる「物質の中心にある頁の部分」を意味している。この背景には物質はすべて書籍であるという「物質書籍根源論」がある。

(13) 「うにの口」は存在する。

(14) 「数炎券」は「うにの口(13)」で食べることが推奨される。他の口ではやけどをするからであろう。

(15) 「韃靼人」は礼節を重んじるので、このようなことを語った後に「潔くお世辞を」したのであろう。

(16) 「一疋x2」というのは「二疋」の文学的な表現であろう。「数学的」と言ってもよいのかもしれない。

(17) 朝、店の前に文が置かれていたのである。不気味な話だ。しかもその文は「巧みが好き」というラブレターだった。カフカは地王星に住んでおり、隣に脳髓に住んでいる。カフカは脳髓に

「巧みが好き」だと言うのだから、店の前に文を置いたのはカフカなのだろう。脳髓が「巧み」と呼ばれていることにも注意しよう。ちなみに、地王星にはカフカは存在しない。ああ「地王星」があるのだから「海王星」もあるはずである。

(18)さて、論理的に考えて一般的に文には左文と右文がある。カフカは丈が一寸の右文を集めて椎茸の束を作ったというわけだ。冬場の食事には最適である。

(19)「○Ⅱ□-の国」は門の向こうにあると考えるのが妥当である。

(20)「定理3⇒暗号1∧筒」は論理式である。

(21)「θ」は猫の瞳をあらわすギリシア文字である。猫の目が混ざっているために困るのである。むしろ喜ぶべきである。

(22)「木材は三ξ」この「三ξ」は「ぐざいぐざい」であり、文頭であるために大文字になっている。すなわち「すべての木材は具材になる」というほどの意味であろう。

(23)「肖蛾」は「樟脳から生まれた蛾」の一種であり、遺伝子組み換えにより頭が三つある。

(24)「苦勞な紋白蝶」では、紋白蝶が目をまわしながら空中をふらふら飛んでいる苦勞に思いを馳せている。

(25)「白拍子寄りの牛」とは、「白拍子」に近い「牛」のことである。

(26)「嘘兎」は、「嘘しかつかない兎」と「兎であること自体が嘘」の二つの意味をかけている。

(27)「正しい角の形」には毎朝三拝するものだが、それを明日も続けていくという信仰への意気込みを表している。

(28)「彼女=彼氏」は三角関係と思われていたことが実は二人の恋愛をことさら複雑に述べていただけということを表している。「硝子の端」が七つあることは「四色問題」と同じく「地理の法則」のひとつであることがわかる。

(29)「らべ侍」の目は取り外しが自在である。目はないほうが楽であると書かれている。

(30)  $-6 = 5-9-2$

(31) わかっていると思いますが、方程式は食物ではありません。

(32) 因幡の重力は大きいので、その重力を利用してなめした革があれば猿の子が成り立つということ。

(33) 「これ」が化森が行った十の反論であるとする、その数は十個ではないようです。

(34) 「アマテスラ水」は天候のために多量の自棄になった水のこと。体によいかもしいない。

(35) 「古名屋」では古い名前を販売している。

(36) 「三交月」とは、三日月と三月月が交わる月のことである。

(37) 「鳥に仮装する」とは、蛹は生涯に一度、鳥に仮装し、ほかの蛹を食べるといわれている。それが本当なのかどうかは知らない。

(38) 「それ」が何なのかは明らかにされていない。

(39) 禿星のことである。

(40) 「きた」は「きいた」の誤記である。このような誤訳が後をたたないのは注意深さが足りないであろう。

(41) 「混沌の子」は「茱里」のことであろう。茱里が韃靼人であることは疑いようがないのである。

(42) 原文「桃ういろうな従兄弟」は、まるで「従兄弟」が「桃ういろう」であるかのような表現ではあるが、この場合は「桃ういろう」が「好き」であると解釈するのが適切である。「桜ういろう」ではない。

(43) 親鸞はそんなことを言っていない。

(44) 「ろーれつの亜鉛」とは「ローレンツの亜鉛」のことである。

- (45) 「篠田」のはじまりである。
- (46) 関西にも節分が存在する。しかし、節分の発祥の地は関西である。
- (47) 論理学の定理だと思われる。
- (48) 「一寸の虫にも五分の定理」ということわざがある。
- (49) 決意をしたのは韃靼人なのだろう。
- (50) これが分数なのか日付なのかは曖昧である。

弟と甥は似ている。長訳

関節を曲げて空を見る微分だ。竹時計を作った。取り囲む芦。兵隊と生水。早朝。構えは三度の巴投げ。竹林の血まみれで立つ気体の虎。体は私。心は暗い。到着を告げる号令の声は古い。鯉節に聞いたのだが、綱吉も仰天した。方舟べあでいが完成した。よいことである。昔は人の話をよく聞いたのですか。いい声です。体の目は韃靼人、心の目は韃靼人。その名はべめる。(マテ茶は舌で味わうもの。馬という名前のくノ一は、忍者の常である陰謀を企てた。リスほどの無駄を省いたら、それは虎の一切れになる)

5度の和音ならば納得だ。道の向こう側からラテラテ好きの女また女。なんということか。十億のワインビネガー。絶滅を逃れた兜ガニの寿命は人間より長いと書かれている図鑑のその次の豆のページの記述には、一口で食べられるほどの雲丹の数割券が挟んであった。韃靼人が深くお辞儀をした。

「ビグモン二足」という店の前に置かれていたカードには「朽ちる君が好き」と書かれていた。隣人の脳髄に直接それを告げるのは誰であれ、地主の星カフカと呼ばれることになる(そのような人物は存在しないと証文には書かれていた)。確かに、これは一寸の右で作られた椎茸の束に過ぎない。だが、斧田が椎茸を食べながら話す力の根源は五分の左だといえるだろう。いえるだろう。雲母の溶岩山は二つあって何ヶ月も暮らした。伏字まじりで「○エエ□一」と呼ばれる国では「定理3ならば暗号1Aと同値」という仮説を反証した。

地理の試験中スルタンは、音叉三郎の子供が十人兄弟であると気づいて大きな声をあげたので不合格になる。上空にいる宇宙人に、音叉三郎の子供は十人兄弟だと知らせようとしたのだ。因果頻度の混合分布 $\theta$ では、木村は三つの底からなる行ベクトルなのである。仕事柄、場所によっては切れることもある自我の肖像はいわば受容体のようなものだ。右の道を進めば困難はないだろうが、左を進めば若力に満ちた蚊のごとき白鳥である。素手の白拍子で寄り切る十人は媚び狙いですネ。煮過ぎたタロ芋(3)の収穫祭で、存在を否定されている嘘兎は食べ過ぎたので、痛風になる。痛みを堪えて嘘兎は正方形の明日に向かって三拝する。韃靼人から生まれた達人である嘘兎は「性別の無意味な人と七つの硝子の端子」と「物理法則の八十」を読んだが、なんだこれかと思った。高次元絞球体の定義が理解できなかったからである。

ペルーの父と狸系の霊母は7749ナンバーに乗ったまま成仏できずにいる。それというのも、地上に眼球を忘れていたからである。ただ、目のないほうが目が楽になると、大勢の言語侍が歌っている。

目の離れた目で見てめるでい  
受信にはもっと近づいて  
鼻毛ならもっとひらめいて



舌ガムの妖精めいてめいて  
しかもしかもしかもしかも  
そしてさわやかでいる

この歌を歌うのが兜兎なら問題はこうだ。糊をすこし食べるだけで背が低くなる。それに少し似ているのは何か。

兜兎はよっぱらい、あばれている。それを狙う虎の目は暗闇にひかる。目の民の視力は検査の値よりも実軸の値が6低く、Y軸との交点に発生する鱗を学ばなくてはならない。勿論、視力の入方程式にバターや麩を加えたら台無しになる。そして、因果の重力傘をさすと、猿の子が誕生する。

これが花森の主張に対する十の反論である。ああ、かみさま。ライオンの手はかみです。しかしトラは全身がかみです。このような憶測は、いつも以前は宇宙の法則だった。夜は岩ですし、芦は夜です。夜に叫び声が響く。

「やかましい」

事実はひとつ。雨の降るテラスの水はどれも青い水玉でした。

世界の最後に発射する列車の時刻は三つの月の重なる時刻に依存するだろう。月の光で孵化する蛹は狂った月の熱量のために顔が小さくなっている。身の安全のため鳥が産まれたと思わせるための仮装衣装を買うために古着屋を訪れたときに事件は起きた。

鳥の目は尻になりその穴を白い糸で縫われたと鳥は感じた。だが鳥の見ためは丁度二匹の妖精であった。白くて甘い糸だった。色は白というよりもさらに、

「マリは休みが好きと言い、それを厳しくない言い方で非難した月は、まさに梢に棲む女と同じ体重だった」

そう聞いた。□の歯のような目だ。□にはいる文字を回答せよ。

戸が燃え通行自由となった門では、王様割引が適用される。もちろん、混乱に乗じて親しい子を推薦するだろう。つまり、ヤナギ女子が大大大好きなイトコを推すということだけだ。

鸞鳥と親しい人は良し悪しを言わない。それを聞いた一寸の文が木の高さよりも低い声で「枝がどうなの!蛇はどうなの!」と騒いだ。服の裾だけと大量の兜とを十分に煮込んだものを食べると、頭がおかしくなるのだろう、亜鉛で作った船はローレンツ短縮で短くなり気体にかわる。そして、短縮によって生じる野生の気圧はよく売れる。

この気体を篠田とする。篠田の心臓に電気を通せば、酉年はもうすぐだ。関西にも節分は存在する。底の方は韃靼人だからである。「6は証明可能」は女性名詞である。足の定理は鼻の一部になっている。弱点は火であることは決まっているのだから、矛盾の証明は帰ってからやれ。証明するときには、全在はストレスがたまるものだ。

三月四日は営業に行く。卑弥呼は行動してからかなり後悔するタイプの性格だ。毛玉で騙す手口なのだ。そして、堤防から町の街頭に挨拶をした。

「共に存在する電車は、時と場と空における蟻のごとし」

米のDNAははじめのころからモアレであった。差を引けば足し算になる。だがモアレだとばかり思っていたが、実はトロールなのだという電話だった。初めからそう決まっているではないか。純粹だった頃の俺がどれくらい怖かったかということ、毎月極め技勝負を一万回しなくてはならない程度です。それは少しも笑えない!そもそも最初から虎模様の塔に関する話だった。音楽に例えるなら、音程と音程の間の薄雪奏は微妙すぎるのだ。

空腹は頬の内側から始まるという言い回しは韃靼人が元祖だ。韃靼人から七メートルの距離をおいて問いかける鰐鳥は、距離に関する独特の感性を持っているが、それがどのようなものかは秘密にしている。答えは「アヒルと鶉」であり土地を転売して儲けていたわけだ。最初からこれまでの話の中には目の民が五人いる。我が家で最も古臭い名前は、ウハアだ。